



チェチェンの子どもたち日本委員会（準備会）

Japanese Committee for the Children of Chechnya

共同代表：林克明（ジャーナリスト）・岡田一男（映像作家）

〒112-0001 東京都文京区白山2-31-2-101 03-3811-4577

<http://chechenchildren.jp/> info@chechenchildren.jp.org

ニューズレター第1号

チェチェン人外科医、ハッサン・バイエフ医師の3回目の訪日にあたって、温かいご支援を下さったみなさま、ありがとうございます。まずは繰り返しのようになりますが、2-3月の日本滞在以後のバイエフ医師の動向からご報告いたします。

バイエフ医師は、離日後、成田からベトナムのホーチミン市に飛び、2週間にわたり、ベトナムの高名な外科医フォク女史と共にベトナムの口唇口蓋裂児童の修復手術に取り組みました。このミッションは、国際慈善医療団体「オペレーション・スマイル」が、バイエフ医師のために組んだ特別プログラムの一環として実現したものです。ベトナム戦争の後遺症として、ベトナムでもかなりの高率で口唇口蓋裂の発症が見られ、チェチェンの子どもたちへの医療問題を考える上で、バイエフ医師には大変貴重な体験となりました。また、ベトナムでは、これまで手術するチャンスに恵まれなかった成人患者の手術も行いました。

この後、4月下旬、バイエフ医師は、モスクワ経由チェチェンに飛びました。このチェチェン入りには、「オペレーション・スマイル」のモスクワ駐在代表が同行し、9月に予定されるチェチェン・ミッションの下準備にあたりました。5月初め、ボストンに戻ると、5月中旬から、特別プログラムの一環で、一ヶ月の予定で南米コロンビアに派遣されました。首都ボゴタ市の陸軍病院で口唇口蓋裂児童の手術を中心に腕を磨きました。現在のコロンビアは内戦状態で、ゲリラとの戦闘で負傷した兵士が、毎日の様に収容されてきて、その手術も引き受けることになったと聞いております。

バイエフ医師は、9月下旬に、10日間にわたる国際医療慈善団体「オペレーション・スマイル」の派遣したアメリカなどからの国際医療チーム26名によるチェチェンの子どもたちに対する、口唇口蓋裂無償修復手術ミッションを成功させました。当初、120件の手術を実施という計画でしたが、400組もの親子が、小児科病院に殺到しました。これら全ての患者に助言活動を行い、重症のものから、60件の手術を実施しました。バイエフ医師の6月から10月までの奮闘がなければ、このミッションの成功はあり得ませんでした。このミッションの受け入れには、グローズヌイ政権の全面的な協力があつたことも指摘しなくてはなりません。国際医療スタッフ受け入れは、外務・諸民族対策・出版情報省が、医療施設と補助医療スタッフの提供は、保健省が、国際医療チーム歓迎慰労行事の組織は、文化省が担当しました。また、成功したチェチェン人実業家たちからも様々な支援が寄せられました。今回のチェチェン・ミッションは、「オペレーション・スマイル」の数多くのミッションの中でも特筆される輝かしい成功となったと評価されています。しかしチェチェンの医療関係者は、現状として、潜在的な患者を含めると、1000名を超す口唇口蓋裂患者の存在を予想しています。このため、「オペレーション・スマイル」のチェチェン・ミッションは、毎年繰り返し行われることになりました。

バイエフ医師は、ようやく10月末にボストン郊外の自宅に戻りました。そして、11月10日にはボストンを出発、11日午後、3度目の来日を果たしました。今回の訪日の主要目的は、第29回日本レーザー医学会総会に招かれて、ランチョン・レクチャーを行うことにありました。日本レーザー医学会

総会がボストンとの往復旅費は負担してくださいました。それ以外の経費、滞在費はじめ、バイエフ医師が強く希望していた半導体レーザー治療器の購入資金などは、JCCCとチェチェン連絡会議が呼びかけた拠金によりました。当初、二週間の予定を考えましたが、バイエフ医師が、ほとんど休日のない数ヶ月のチェチェン滞在で疲労しており、米国へ戻ったら腎臓機能について精密検査の必要を感じていることから、日程の短縮を図りまた、関係者の大きな努力の割に、拠金の集まり具合が鈍い事も勘案して、極力経費を切り詰める方向で、動きました。でもバイエフ医師が、本当に来た甲斐があったと、満足なる展開となりました。

テレビ放送

NHK BS1 12月2日晩の「今日の世界」の中で10分あまり、バイエフ医師来日が紹介されました。取材確定がレーザー医学会総会以後であったこと、インド・ムンバイでの連続テロ事件などの影響で最初の放送予定が飛んだり、担当者の苦労も並大抵ではなかった様です。

第29回日本レーザー医学会総会

11月15-16日、都下八王子にある東京工科大学の片柳研究所棟を会場に、560人の参加者で開催されました。総会長を、バイエフ医師の埼玉医科大学埼玉医療センター外科教授、橋本大定先生が務められました。またバイエフ医師のレーザー治療の手ほどきをして下さった信濃町の大城クリニック、大城俊夫先生は同学会の副理事長をされています。この学会は国内学会なので、用語は例外を除いて日本語でした。日本のレーザー医療は、世界の先端に行くもので、多岐にわたるレーザー医療の最先端の話題が取り上げられる学会で、バイエフ医師にとっては、どんな話題がトピックスなのか以上を理解することは困難だったかと思われそうですが、大変有益な2日間でした。様々な分野でレーザー医療に取り組まれる先生方と知り合いになれたこと、来年開催される様々な国際レーザー医療関係の催しの関係者ともコンタクトがあったこと、これまでインターネット上での情報収集、電話連絡でしかなかった、様々なレーザー治療機器の販売関係者とも併催された機材展を通じて語り合い、現行機種に関して実機を見ることができたこと、既に入手していた中古治療器の運用について、様々な経験談や評価、助言を参加者の諸先生から親しくいただけたことなどが上げられます。16日のランチオン・レクチャーでは、4会場で同時並行という会場の関係で、100人近い聴衆の多くが形成外科関係者という中で行われましたが、なかなかの盛況でした。

半導体レーザー治療器

今回のバイエフ医師の来日の目的の一つは、2-3月に大城クリニックでトレーニングを受けたレーザー治療のチェチェンでの実施を可能とする治療器の入手がありました。半導体レーザー治療器は、基本的な機能は1980年代半ばに、大城俊夫先生が松下電器産業（現パナソニック）の協力で開発されたLLL（低出力レーザー治療）システムを発展させたもので、かなりのメーカーが製品化してきましたが、松下製品のOEMである持田シーメンス、ニーク製品のOEMであるミナト医科学、M&RのOEMであるエム・アンド・エムの3社のものが現行製品では有力です。もともと大城先生が開発された当時のレーザー出力は60mWでしたが、持田シーメンス製品は、皮膚下への浸透性を強化する目的で出力を強化する方向で、その後の開発が進められ、現行機種では、1000mWのものと、間歇的にパルス光を出

す 10W のタイプが発売されています。今回入手できたのは、1 台目が持田シーメンスの MLD-1005 という出力 1000mW の連続光を出すタイプで、現行機種ですが、2002 年頃製作された製品と思われます。どうしても 900mW くらいしか出力せず、某病院からお払い箱になったと売ってくれた中古業者は説明しています。大城先生から、そんな高出力は、もともと必要ないのだから、照射時間の調整で充分使用できると助言をいただき、中古市場の通常価格と比べても破格の安値で購入できました。他の中古業者の売値では、使用後 10 年以上を経た製品の価格で入手できたことは非常にラッキーでした。レーザー医学会総会中に、助言をくださったお一人である青森県五所川原市白戸胃腸科外科医院の院長、白戸千之先生が、自分は保有しているものの、あまり使っていないからと、エム・アンド・エム社のマルチレーザー 5 という製品を無償でご提供いただけることになりました。白戸先生は、大城先生が開発試験をされていられた 80 年代初めから治験活動に参画された方で、半導体レーザー治療器の使用に関して最も経験豊かな方です。チェチェンにおける半導体レーザー治療器の導入に関して、大城先生だけでなく、白戸先生にご助力いただけたことは、今後の運用について大変心強いことです。マルチレーザー 5 の最大の特徴は、出力 60mW の出力口が、5 つもあり、しかも吸着タイプのプローブ 4 つを様々な患部に取り付けたり、複数の患者に取り付けたりできることなど他社製品にない特色があり、岡田もバイエフ医師も非常に興味があった製品ですが、製作台数が少ないせいか、主要な使用者が、病院より整体治療関係者などが多いためか、中古市場にでることが少なく、入手が容易ではありません。後日、エム・アンド・エム社からも取扱説明書をいただける事になりました。バイエフ医師の構想では、自分のチェチェン不在中も、アルハン・カラ村在住の二人の看護師、実姉のアヤトさんと姪のラジヤトさんが機材を管理するだけでなく、訓練をつんで効果的に運用することを考えていました。そういう点では、これら 2 台の半導体レーザー治療器が、同時にチェチェンに届けられることは、2 種の微妙に異なる機種を症状によって使い分けることも可能になって、非常に嬉しい展開になりました。あらためて入手に協力してくださった皆様にお礼を申し上げます。この 2 台は既に、岡田がモスクワまで届け、グローズヌイへの安全な送達のチャンスを待っています。具体的な運用開始は、バイエフ医師がチェチェンに向かう 2009 年 1 月からになります。もともと日本での半導体レーザー治療器の認可された用途は、疼痛緩解といったものですが、チェチェンでの使用目的は疼痛緩解もさることながら、手術痕や火傷痕、ケロイドなど戦傷の治療です。傷を切除せず、血行を良くしていくことで体の内部から改善して行くという発想です。かなり時間がかかるので、即効性はありませんが、今後が期待されます。

筑波大学附属高校の柔道着提供

2006 年秋のバイエフ訪日にあたって講道館国際部との橋渡しをしてくださった筑波大学附属高校の柔道教師、鮫島元成先生と 11 月 14 日にお目にかかり、鮫島先生が既に 50 着の高校生が使った柔道着をご提供いただけることになりました。ハッサンの自宅のある村、アルハン・カラは、30 名以上の有段者いて、柔道クラブも三つあるという柔道の盛んな村ですが、今回の柔道着提供は、こうしたチェチェンの柔道振興に大きな弾みをつけるものです。鮫島先生は、講道館関係の他校柔道教師にも働きかけてくださるといいますので、今後の柔道交流の進展が期待されます。課題としてご提供いただく柔道着のチェチェンへの送達という課題があります。12 月中にも、この問題を解決して早期に送達を実現したいと思っています。柔道交流のゴールは、日本の柔道家がチェチェンに実際に行ってチェチェンの柔道を学ぼうとする若者たちと交流できるようになることです。鮫島先生は、講道館で国際

部の他、視覚障害者の柔道普及にも取り組んでいただけます。

日本大学（三島校）国際関係学部安元ゼミ

安元隆子先生は日露交流史などの研究者として知られる方ですが、ゼミの学生さんと、11月初めの学園祭のイベントとして、チェチェンの子どもたち救援のためのチャリティ企画「チェチェンへ届け！

音楽が運ぶ希望♪」を組織してくださいました。ICCC への支援金集め、遊休楽器の収集、柔道着など格闘技の着物収集やスポーツ用品収集をしてくださいました。基本的にはグローズヌイ中央郵便局局留めで送って下さると言うことですが、子供用バイオリン基は、ボストン在住のチェチェン難民の子どもが欲しがっているが、親には新品を購入してやる余裕がないということで、バイエフ医師がボストンに持ち帰りました。このイベントにあたって共同代表の岡田が「チェチェン戦争と子どもたち」と題して講演をさせていただき、林はチェチェン取材で撮り貯めた写真を展示に提供しました。

会計報告

今回の招聘とレーザー治療器購入などに関してバイエフ指定寄付は、12月10日現在で448,970円にのぼりました。昨年度に出た赤字を埋めてしまうと、まだ今回の招聘の資金が捻出できたことにはならないのですが、今回の招聘は、大幅な経費削減が幾つかのファクターにより実現できました。いろいろな方々が会食にお招き下さって、食費がかなり削減できました。稲垣収さんのご好意で、2泊をホームステイにさせていただき、宿泊費も軽減できました。レーザー治療器が当初予想の数分の1で入手できた上、関西地方まで足を運ばずに済みました。これらにより出費は、宿泊・食費・交通費など約100,000円、レーザー治療器や周辺機など物品購入費150,000円あまり、これで合計が250,000円あまりとなります。実際には講演会案内などの印刷や郵送に要した費用が加わりますが、300,000円を下回る金額ではないでしょうか？当初予想の3分の1、直前予想の半分で済みました。ですから、拠金としての目標は達成できなかったけれども、第3回目の招聘の課題は、上述のように十分達成し、しかも過去の赤字は一部を解消できたという事だと思えます。

これをもって、ハッサン・バイエフ医師第3次招聘の活動報告といたします。本当にみなさま、ご支援ありがとうございました。

次号では このところ、バイエフ医師へのサポートに忙殺されて、思うように作業が進みませんでしたが、アゼルバイジャン、バクーでのザーラ・イマーエワさんの動静と、彼女の最新ビデオ作品、そして彼女も加わったカザフスタン取材ドキュメンタリー「ディアスポラ」の完成を目指しての取り組みについてお知らせします。

文責： 岡田一男